

## 粗飼料多給と大麦利用による去勢牛の理想肥育

伊東克久・\*一野俊彦・大野人見・橋爪義昭(大分県畜産試験場・\*大分県畜産課)

ITO K., T. ICHINO, H. OHNO and Y. HASHIZUME : Using of Roughage and Barley for Fattening Steer

牛の肥育前期に良質粗飼料を多給し、中期以後に大麦圧べんを混合し、次第に給与割合を増加した場合の発育増体及び肉質に及ぼす影響を検討したので、その概要を報告する。

## 1. 試験方法

- 1) 供試牛：黒毛和種去勢牛10頭
- 2) 試験期間：1980. 4. 21～1981. 8. 14(480日間)
- 3) 試験区分及び飼料給与：第1表のとおりであり、大麦混合区(以下A区という)と間検配合区(以下B区という)の2区に区分した。
- 4) 飼養管理：パドック付追込牛舎、5頭群飼

第1表 試験区分及び飼料給与

	前期(150日間)	中期(150日間)	後期(仕上げ)(180日間)
大麦混合区	配合1.5kg 間検 牧草乾草飽食	間検配合50% } 飽食 大麦圧べん450% }	間検配合20% } 飽食 大麦圧べん80% }
間検配合区		間検配合を後期まで飽食	

注) 1. 間検検定配合飼料(間検配合)の成分DCP10.1、TDN72.3

2. 中期～後期の粗飼料は両区とも稲わら飽食

## 2. 試験結果及び考察

- 1) 増体の状況は第2表のとおりである。

第2表 増体の状況

区 分	日齢	日齢 体重	体 重(kg)		体 高(cm)		D G (kg/日)			
			開始	終了	開始	終了	前期	中期	後期	全期間
大麦混合区	260.8	0.87	227.8	604.1	108.8	134.3	0.64	1.00	0.72	0.78
間検配合区	263.4	0.97	255.2	651.0	111.9	136.2	0.62	1.12	0.77	0.82

第3表 飼料の摂取量及び要求率

項 目	A 区		B 区	
	全期間		全期間	
飼料 摂取量	濃厚飼料	1日平均	kg 5.52	kg 6.33
	飼料	期間総量	kg 2.648	kg 3.039
	粗飼料	1日平均	kg 2.63	kg 2.88
		期間総量	kg 1.265	kg 1.383
飼料 要求率	濃厚飼料		7.03	7.68
		粗飼料	3.36	3.49
	養分	D.C.P	0.81	0.99
		T.D.N	6.68	7.99

第4表 枝肉調査結果

項 目	A 区		B 区	
	平 均		平 均	
と 殺前体重	kg	539.8	kg	590.4
枝 肉 量	kg	344.4	kg	396.8
枝 肉 歩 留	%	65.7	%	67.2
背脂肪厚さ	mm	19	mm	24
ロース芯面積	cm <sup>2</sup>	45	cm <sup>2</sup>	45
脂 肪 交 雑		3.1		3.1
枝 肉 等 級		特1 極2 上.2		特2 上.3

A区は仕上げ平均体重604.1kg, B区651.0kgと両区とも600kg以上に上げることが出来た。A区は増体が少し鈍い傾向があり、個体間で見ると、DGが0.72～0.89kgとバラツキが大きかった。B区は増体がよく、0.80～0.88kgと比較的そろった増体状況であった。これはA区の個体別のバラツキが大きく、特に肥育開始時に2頭が、体高104cm, 日令体重0.77～0.83kgと発育が劣っていたのが肥育終了まで増体成績に悪影響を及ぼした。

- 2) 飼料の摂取量及び要求率は第3表のとおりである。

牛の発育成長期に当たる肥育前期には濃厚飼料を制限し1日1頭当り1.5kg程度と良質粗飼料を飽食給与し、中～後期には間検配合に類する飼料と稲わらを飽食させることにより、目標の発育増体が(0.8kg/日)が期待できた。肉質改善をねらった飼料給与の方法についてはまだ不明点が多く、今後の検討を要する問題であるが、前期に粗飼料を多給する方法は、厚脂に改善効果が期待できるのではないかと考えられた。また大麦の利用については、飼料効率を高める傾向がみられるが、その効率的な配合割合等について今後検討を要する問題である。

- 3) 枝肉調査結果は第4表のとおりである。

A, B区とも枝肉歩留は比較的良好であった。皮下脂肪はA区が概して厚くなく平均19mm, B区はバラツキがあり平均24mmでやや厚脂のものがあった。脂肪交雑等の肉質に関しては両区の差異はほとんどみられなかったが、大麦の給与は皮下脂肪が厚脂になることを抑える傾向があった。

以上のことにより、飼料資源の乏しい我国では濃厚飼料の節減と、粗飼料の活用は常に重要な問題であって、黒毛和種のもつ特性としての上質肉生産で所得の拡大を旨すべきであると考える。